

第十二回同窓会大会の報告

十一月二日、鯉淵学園新館三番教室において、会員約六十名の出席のもとに第十二回同窓会大会が開催された。

時を同じくして、卒業後三十年を記念しての一期生会が、また大会の前日には十周年会が開催された。一期生会は出席者数約八十名と盛大で、周年なら、同窓大会を盛り上げてと書くところであるが、参加された個々の約半数は指導員養成所卒、同じ面の観をくつた人間関係でありながら、同窓会とは直接関係のない大先輩、このような事情もあって、一期生の大会参加はなく、それぞれの会場が同一建物内であったことも手伝い周年とは違に大会を淋しいものにしていった。

大会は先ず、会長の挨拶で始まり、続いて近岡学園長代理の祝辞があり、議長に藤原要一氏（栃木十期）、副議長に和田隆氏（神奈川二十三期）を選出して議事に移る。

昭和50年12月1日
発行所 茨城県東茨城郡
内原町同窓会印刷所
印刷所 柳 双葉印刷所

昭和四十九・五十年年度の経過報告、事業報告並びに決算報告が執行部より一括してなされ、報告書より監査報告が行われ質疑応答の後、全て執行部報告の通り承認された。

昭和五十一年・五十二年年度事業計画等の審議に先立ち、会則の一部改正案が提出され、審議の結果、同窓会会費年度当り五〇〇円を一、〇〇〇円に値上げする改正案が承認された。

昭和五十一年・五十二年年度事業計画並びに予算については創立三十周年事業を核に実施を骨子とした執行部案が提出され、審議の結果、会費の徴収方法の再検討、とくに、支部一括納入の促進と納入方法

終身会費制度の再検討を常任委員会において早急に実施し、支部長会議にはかつた上で実施する。支部長会議は早期に開催する。の付帯条件をつけ、事業計画の大綱並びに予算については原案通り可決

された。

最後に昭和五十一年・五十二年年度の役員を選出し大会の幕を閉じた。尚、会費納入率の低さと関連し、会費徴収方法について、事務局の不備を指摘する発言や、会員と会費の関係等、基本問題に触れる発言が多々あった。

承認された昭和四十九・五十年年度の諸報告と可決された昭和五十一年・五十二年年度事業計画並びに予算、選出された新役員は次の通りである。

一、昭和四十九・五十年年度

経過報告

昭和四十八年十一月三日の第十一回同窓会大会の決定に基づいて実施いたしました両年度の事業並びに決算報告は別紙の通りであります。

三十周年記念事業のうち、民芸館の設立に伴う民具の収集は、学園の施設整備計画が情勢の変化により大幅に遅れ、現在もなお民芸館予定建物の改築の見通しは全く立っておりませんが、失なわれず、民具を重要視し、この事業の推進体制不十分ながら、実地に踏み切り、会報をもつて会員の皆様に御協力をお願いした次第です。

同窓会館の設立については、役員会を開催する等して検討を重ねた結果、学園として国庫補助による教育施設（同窓会館）を建設する。それに同窓会が協力することによって現実のものとするの方向で学園と連携し、去る六月、五十二年度補

助物件として国庫補助を要請するとの確約を学園から得、速に同窓会として協力の体制づくりを要請されるに至りました。支部長会議開催ができなかった理由も上記事業のむずかしさにあり、実現可能な計画案の作成ができなかったことによります。

会報の発行・会員名簿の発行、その他同窓会として基本的な事業は計画通りの遂行ができませんでしたが、そればかりか同窓会活動に熱心な会員に御迷惑をかけしており、会員各位に深くお詫びする次第です。

事業停滞の理由は会費納入率の低さもありますが、何よりも先ず同窓会事務局の弱体化にあり、いま、学園に職員として働く卒業生の一部は管理職として困難な学園の運営にあたり、他の卒業生も学園業務に追われ、職務を遂行するのが精一ぱいの実状にあります。こうした中で同窓会業務の運営は、会計の一部等について学園の協力があるものの、その大半は少数卒業生の犠牲によって行われ、細々と運営されているのが実態です。

さいわい、今後は学園として事務職員の中に同窓会業務を担当する職員をおき同窓会に今迄以上に協力することが検討されておりますので、今後は停滞した業務をとりもどすことが出来ると思っております。名簿の発行については次年度にまわすことになりましたが、できる限り早い機会に発行するつもりで準備をすすめております。

会費の納入状況は事業の停滞が影響してか前年度（四十七・四十八）に比し大幅減となりました。支部一括納入については岩手・宮城・栃木・長野・静岡・兵庫・愛媛・佐賀の八支部に実施していただきました。

二、昭和四十九・五十年年度 事業報告

第十一回大会の決定に基づき実施いたしました事業は次の通りであります。

(1) 会報の発行

第十九号 昭和四十八年十二月

副学园长就任にあたって

第十一回大会の報告誌

第二十号 昭和五十年八月

三十周年記念事業について

学園の近況他

(2) 常任委員会の開催

第一回 昭和四十八年十一月三日

事務局長の選出

第二回 昭和四十九年一月二十六日

四十九・五十年年度事業の推進

方策について他

第三回 昭和五十年二月二十八日

三十周年記念事業について他

第四回 昭和五十年七月五日

三十周年記念事業について他

第五回 昭和五十年九月二十七日

第十二回同窓会大会について、

三十周年記念事業について他

(3) 支部会への役員派遣

八期生会 坪野常任委員出席

昭和四十九・五十年年度の事業報告書並びに会計決算報告書は、正確適正であることを認めます。

昭和五十年十月二十八日

鯉沼学園同窓会監事 武内 十郎郎

張野誠一郎君

及川 博君

三、昭和49・50年度決算報告書

1 一般会計

(1) 財産目録

種 別	全 額	内 訳
資産の部 現金	78,486円	学園総務課に保管
負債の部	0	
純財産	78,486	

(2) 収支明細表

収入の部

科 目	予 算 額	決 算 額	残 金
前年度繰越金	355,257円	355,257円	円
会 費	2,200,000	803,000	1,397,000
預 金 利 子	182,000	192,183	△ 10,183
名 簿 代	700,000	4,500	695,500
鯉沼学報代	500,000	0	500,000
その他収入	50,000	6,842	43,158
合 計	3,987,257	1,361,782	2,625,475

支出の部

科 目	予 算 額	決 算 額	残 金
会報発行費	550,000円	191,730円	358,270円
鯉沼学報助成費	300,000	150,000	150,000
支部長会議費	430,000	0	430,000
名簿発行費	600,000	15,000	585,000
通 信 費	295,000	167,957	127,043
人 件 費	384,000	181,670	202,330
事 務 費	220,000	25,512	194,488
旅 費	370,000	98,180	271,820
会 議 費	140,000	67,195	72,805
30年記念事業費	100,000	0	100,000
返 済 金	246,000	246,000	0
子 編 費	352,257	140,052	212,205
合 計	3,987,257	1,283,296	2,703,961

差引残高 78,486円

2 基本金会計

(1) 財産目録

種 別	全 額	内 訳
資産の部 現金	165,000円	学園総務課に保管
預 金	500,000	鯉沼郵便局普通貯金
預 金	600,000	三菱信託銀行
預 金	800,000	中央信託銀行
合 計	2,065,000	
負債の部	0	
純財産	2,065,000	

(2) 収支明細表

収入の部

種 別	全 額	内 訳
前年度繰越金	293,000円	
49年度入会金	97,000	97名入学
50年度入会金	129,000	129名入学
返 済 金	246,000	一般会計より 49年度一般会計貸付
合 計	765,000	

支出の部

種 別	全 額	内 訳
預 金	100,000円	中央信託銀行
預 金	500,000	鯉沼郵便局
合 計	600,000	

差引残金 165,000円

昭和四十八年十一月三日

京都部

橋本支部会 西村常任委員出席

昭和四十九年一月二十六日

宇都宮

岩手支部会 砂田常任委員出席

昭和四十九年七月二十日

花巻市

新潟支部会 坪野常任委員出席

昭和四十九年十一月三十日

六日町

茨城支部役員会 事務局長出席

昭和五十年六月二十日

平潟町

(4) 学園教育に対する協力

・ 学生募集への協力

・ 会報十九号により協力

・ 特別研究旅行への協力

・ 見学旅行先の支部会員の皆様による

・ 年のことながら御協力と種々御配

・ 慮をいたしております。

(5) 鯉湖学報の発行助成

第二号 昭和五十年九月一日発行

昭和四十七年一月、鯉湖学報発行事

業を学園に移譲してから三年余を経過

してようやく学園として第一号を発行

されました。

(6) その他の事業

各支部からの要請により会報と会報

の間をつなぐものとして、「同窓会情報

№1」を作成し発送しました。№2、

№3と作成の予定でしたが事務局弱体

のためはたせませんでした。

四、昭和五十一・五十二年 度事業計画並びに予算

一 事業計画

(1) 同窓会会報の発行 三回

第二十一号 五十年十二月

第二十二号 五十二年一月

第二十三号 五十二年九月

会員名簿の発行

五十二年一月末日までに発行

(2) 鯉湖学報の発行助成

第三号 五十二年度

第四号 五十二年度

原稿の募集に協力

鯉湖学報各号とも五〇〇部発行費

の負担

(3) 支部長会議

第四回支部長会議を五十二年早い

機会に実施する。

(4) 三十周年記念事業

イ 民芸館設立に伴う民具の収集

・ 民具の収集事業は長期間に亘っ

て継続する。

・ 会報等を通じて民具収集の協力

を呼びかける。

・ 各支部とも責任をもって五十一

・ 五十二年度中に五五程度収集

する。

・ 各支部の収集民具は地域的特色

を示すものを考慮する。

・ 民芸館が設立されるまで保存容

積を大きくとらないものを収集

する。

供し貴重な民具は除く。

同窓会館の設立について

一 学園教育及び農村生活の改善向

上に資する施設の建設に対する協

力について

① 農村生活の改善向上に資する

教育施設の補充的役割を果すも

の

② 外来講師の宿泊及び講義準備

の可能なもの

③ 同期生会、新婚旅行、旧婚旅

行等同窓生の会合・宿泊のでき

もの

④ 農村文化創造館（五十二年度

以降学園が国費補助要求予定）

が建設されることになればこの

計画に合体する。

⑤ 同窓会の拠金は二千万円

とし、五十二年・五十二年にお

いて行う。

⑥ 具体的計画及び設計はこの大

会終了後、同窓会常任委員会に

おいて行なうものとする。

(6) 学園教育に対する協力援助

学生募集について協力

卒業生の就職斡旋援助

昭和51・52年度予算

収入の部

科目	金額円
前年度繰越金	78,486
会費	2,560,000
預金利子	234,000
名簿代	1,050,000
鯉湖学報代	400,000
その他収入	50,000
合計	4,372,486

支出の部

科目	金額円
会報発行費	835,000
鯉湖学報助成費	350,000
支部長会議費	450,000
名簿発行費	800,000
通信費	335,000
人件費	480,000
事務費	200,000
旅費	320,000
会議費	190,000
30年記念事業費	100,000
予備費	312,486
合計	4,372,486

五、昭和五十一年度役員

会 長	副 会 長	常任委員	監 査
和 田 文 雄 (宮城 3)	榎 井 昭 利 (学園 2)	砂 田 義 雄 (学園 5)	武 内 十 郎 (東京 4)
兼常任委員長	小 泉 信 吉 (茨城 4)	坪 野 敏 美 (〃 7)	張 替 誠 一 郎 (茨城 5)
副 会 長	石 井 隆 夫 (茨城 4)	吉 沢 秀 子 (〃 7)	鈴 木 光 雄 (茨城 8)
常任委員	市 野 沢 弘 (茨城 10)	高 橋 隆 三 (〃 9)	
〃	本 宮 好 美 (茨城 12)	枝 川 重 二 (〃 13)	
〃	梅 崎 孝 臣 (茨城 13)	小 野 口 滋 子 (〃 24)	
〃	白 土 忠 男 (東京 9)	小 谷 浩 二 (〃 27)	
〃	前 原 敬 (東京 16)	山 本 幸 信 (〃 27)	
〃	西 村 典 夫 (学園 4)	飛 田 元 雄 (〃 27)	
		小 沼 和 重 (〃 29)	
		古 賀 三 弥 子 (〃 29)	
		武 内 十 郎 (東京 4)	
		張 替 誠 一 郎 (茨城 5)	
		鈴 木 光 雄 (茨城 8)	

支部だより

兵庫支部

兵庫支部

兵庫県支部同窓会は栗山支部長が長年携わってきた農業関係の仕事から、全く未経験の新しい分野の仕事の責任者として転出されたことに伴い、五年前辞意の表明があり、執行体制の要を失った状態で、支部活動が停滞していたが、今春、有志による橋本清伯氏(六期)の住宅新築祝賀会を契機として休眠打破の話しが

もち上り、同窓が最も多い県中央会の在職者が連絡と準備に当り、さる五月十一日、神戸市は兵庫県庁舎近くの清月荘で久方ぶりの同窓会を開いた。農繁期と通知状の発送日から開催日までの日数の少さ等の問題もあったが、期から二十八期までの同窓二十人が参集し、経過報告のあと、支部機構の確認と執行部の選任について協議し、支部長に栗山要氏(一期)、事務局長に加藤繁氏(十期)を再選し、支部活動の復活を了承し、

出席会員から本誌の本部同窓会費を徴収し、久方ぶりの懇親のひとときを過ぎ、建学の理想を支部長から説かれ、昔の情熱を呼びさまし、同窓同志の絆を固くし、消息を求めて名簿を完全にし、次回支部大会を盛大に開くことを申し合わせ寮歌を高唱して散会した。

以下出席会員を中心に同窓の近況を報告する。(敬称略)

〇 一期栗山要―日本講演会代表者、神戸港を象徴する中突堤近くのビルに事務所を構え各界名士の秀れた講演を記録して各界指導者層の会員に定期刊行物「日本講演」として提供する仕事を主宰。令息がすでに大学を卒業して就職。二十期以降の同窓生が息子に見えたと言うのが若き日の理想と情熱はまだまだ燃えている様子。

〇 五期加藤信二―栗土本部神戸土木事務所用地第一課長。農林部在職二十余年で現職に転じて一年、県職員組合の活動家として定評があり関係者から「信ちゃん」の愛称で親しまれ、いわゆる出世街道に乗ることを潔とせず、県職員・労働者に大衆の福祉向上の初一念を貫徹、推されてことしも県職組執行役員に立候補。支部長の発起で同窓一同は精神的支援を決議、顔はやはり黒い。

〇 五期山下優勝―県農試病虫科主任研究員、兵庫県の農作物昆虫研究の権威。普及員でも常務指導員でも虫のことなら何でも聞け、いや試験場への相談ならどこへでも話をつけてやると。そのはず、卒業以来試験場生活二十五年のベテラン、

明石から動きたくないとのこと。

〇 六期橋本清伯―明豊商事Kk常務取締役。その昔は神戸中央市場・青果会社の模範社員、早くから独立の志を抱き、それを実現、リングだけのことでは二十数億の取扱とか、産地は四国だが、職業柄が趣味多彩猪六十七頭のレコードをもつヘンターとしても名あり獵友会の顔役、マイカーで県内奥地にも詳しく、書画骨董の類の日も肥え、陶器刀剣・鏝の蒐集もあり、酒を愛し来客歓迎、新居を訪えば、実物を示して講釈を受けることうけあい。

〇 十期今井(小野田)定彦―昭産プロイラーKk常務取締役。かつて昭和産業社員として県内伊丹市に居住、現在は同社から出向して京都府、兵庫県の夜久野高原でプロイラーの孵化から飼育販売まで、二十六人の従業員の所得の確保、地場産業として飼育経営の育成指導の責任者として第一線の活躍中。ご存知の畜産情勢、企業と農家、従業員の共存の道を求めて剣が峰にある感。同窓会は初めての出席、企業の中で良心的に生きることがモットー。京都府福知山市在住。

〇 上期加藤繁―県中央会常務生活部長。面倒見がよく、多忙の中で事務局長職を兼ね願せず。O・K。職員教育で実績を挙げ、生活面活動の新しい道を開いて現職。蓄積が大きいので理詰めの仕事、県農協農政の舞台廻しを務め、八面六臂の活躍中。購書読書はいよいよ旺んで質、量とも随一。若い同窓・若い職員の情報頼は厚い。職員教育の担当科目のテキス

トは自ら作る。

○ 二期福田道男―県中央会企画室次長。挫折をくり返し乍ら、漸く安心立命の途を信仰に求めた。中途採用、若い日の様々なコンプレックスから最近解放されたとのこと、農協運動の総合企画といふ共同使所的な雑用を処理。話にならぬ固物と本人はそう思っていないが、後進の同窓から評価される。蹉跌・挫折に悩む人の力になりたいというが。

○ 十五期近本恭記―県中央会教育広報部調査役。加藤先輩の後を追って研修所で職員教育、簿記会計を教授。現職は機関誌、教育誌紙の普及、婦人、青年組織の育成指導担当、職務に熱心。同窓会の資料に「地上」広告のチラシを配り、家の光もスポンサーかといさかない先輩が半畳を入れた。直往邁進の根性あり。

○ 十九期出店利彦―洲本普及所同期生より七年も年長で経験豊富。重厚で畜産特技の普及員。播州での普及員生活を経て現任地は郷里の淡路。加藤信先輩の職組執行役員選出を地方にあって推進。農改としては支部同窓で最古参。今後、同窓との連絡を一層密にする由。

○ 二十期柴垣仁司―県中央会農協研修所。郷里の但馬支所在任七年、声価を挙げて昨年から現職。経営監査関係なら何でもこなせるが、目下は農協法担当。中央会中堅のホープ。すでに二児の父。神明道路に近い西神戸の果樹住宅に最近入居。勤務地は明石市魚住町。

○ 二十一期甲谷克巳―加古郡母里農協

営農指導員出身は岡山だが、卒業以来現職を続け信望厚く、みこまれて同地で妻帯、根が生え、同農協が所属する東播南

部地区営農指導の隠然たる実力者。県でも上部団体でも同地区区内で営農関係で事を起す際には、その口利きがあれば他の指導員へ従って農協がついて行くという。

○ 二十二期高木経吉―養父郡農協宿南支所。現職は販売購買経済事業一切のきりもり、都合併と大規模化した農協がいかに組合員に密着しうるかを問題として精進している。

○ 二十三期森友敏則―但東町農協管理課。組合科出身だが、まず、営農を担当し(産組学校卒の組合長の方針)現在は処理課にあって活躍している。

○ 二十四期小林徹―県経済連播原支所。現在、郷里の自宅から通勤できる出身地の支所勤務。元氣旺盛、同窓会なら万障さしぐることのこと。

○ 二十三期田中義治―灘神戸生協。マ

身を命ぜられ、(兵庫県には生活指導員の男性化の傾向あり)婦人相手の活躍中。

○ 二十四期豊田潔―兵庫県鶴岡農協連。県酪連で五年、結婚して新居をもったが、県酪連はことし、全日本ホルスタイン共進会の主催県として、平常業務の上に準備の業務がかぶさってきて、極めて多忙。夫人と余暇を楽しむユトリがないと。

○ 二十四期長尾輝大―県中央会経営監査部。中央会就職後、講習所勤務、兄貴分として講習生の世話をやいたあと摂津支所(本部と同居)を経て、経営監査部に移った。監査士として監査に従事する一方、農協の経営指導の領域の諸問題の改善にとりこんでいる。相変らず色は黒

愛知支部

愛知県支部誕生

九月二十七日―二十八日に、県内で数少なくなった白砂松青の知多郡南知多町山海において数年ぶりに同窓会を開催いたしました。永年懸案になっていた同窓会支部設立のはこびとなりました。

同窓生の少なかった当初は、家庭訪問など家族ぐるみの交流もできましたが、年を追うごとに人数もふえ、定期的に関催していた同窓会もただえがちになってしまいました。その後、同窓生の結婚とか、学園諸先生の御来県、また、在校生の特研旅行の視察案内等の機会をとらえての親睦交流を図ってまいりました。し

い。独身にも別れを告げる時期だが。

○ 二十五期関口忠士―篠山町役場多紀支所。町職員として京都府境に近い丹場の農山村で目下は土木関係業務を担当。

○ 二十六期山本篤良―出石郡但東町農協。二十三期の森友君と職場同じくし、丹後ちりめんの密細機業と兼業の多いこれも京都・宮津市に近い農山村の農協の事業活動展開の困難さを体得させられている。

○ 二十八期武久正篤―水上郡拍原普及所。県の普及員に優秀な成績で採用され、会議での発言・勤務ぶりも良好で、農協技術関係の先輩からも着目され、上司の期待も大きいフレッシュマン。丹後の農民のために頑張る。

か、その集りも地域的、同期的なことになっておりました。

今年に入って、勤務場所も近く、人数も多い十九期―二十二期生を中心に、先輩・後輩に呼びかけがあり、再出発のきっかけになりました。早速数人の発起人をきめ、名簿の整理からはじめましたが、消息のわかっただけで五十数名の同窓生が在住することが明らかになりました。

子と同輩の後輩と、成る者は又親や兄貴の年の先輩をつかまえての議論は、一朝半をわすれて種別長屋にもどった感があり、陽なたになって後輩のめんどうをみてくださっている。二期の岩田さん（農協中央会農政営農部長）を議長に、愛知県同窓会支部設立総会を開催し支部規約の審議、事業内容の検討の後、次の様に役員を選出を行いました。

- 支 部 長 奥田勝己（7期県農業技術課）
- 副支部長 坂丸義弘（19期東知多農協）
- 会 計 奥田勇可（20期山田農協）
- 幹 事 河合球二（7期農協中央会）
- 伊藤明男（13期共 済 連）
- 大滝明吾（17期立山種別支部）
- 木村正市（20期緑 農 協）
- 久胡信隆（21期東知多農協）
- 監 事 間宮善海（5期農協中央会）
- 小川明義（20期共 済 連）
- 早速役員会を開催し、名簿の再整理、欠席会員への周知徹底をすゝめ、再建同窓会支部がスムーズに運営できるよう努力しています。
- 支 部 長 奥田勝己
- 連絡先 名古屋市場地区井戸田町2-51
- TEL 81-8441-19847
- 勤務先 愛知県農林部農業技術課
- TEL 81-961-1211 内線 3322
- 追 伸 間宮善海氏五期愛知農協中央会理事に、明晰な頭脳と我群の企画力を買われ十月一日付で理事に昇格されました。福市化の波にもまれながら、特徴ある農

業を展開している。愛知農業のリーダーとして今後の活躍が期待されております。

香川支部

去る四月十二日、支部総会を開催し、昨年からの支部活動の活性化等を目的に検討していた「支部規約」が制定された。支部役員は次の通りである。

- 支 部 長 和田 久夫（4期）
- 副支部長 寒川 秀男（10期）
- 監 事 富家 優（14期）
- 事務局 川崎 武司（19期）
- 林 道夫（26期）
- 山花 健（26期）



（香川支部）S 50、4、12、於薬林公園

支部長会議開催時期
四月中下旬に予定

事務局からのお願い

一、会費納入について

第十二回同窓会大会において、年度当りの会費を一、〇〇〇円とすることに決定したことは大会の報告の通りです。会費は年度の始め納入いただくことに会期で定められておりますが事務処理や送金の混雑さを少なくするために二年分を一括しての納入に協力いただいております。今年も昭和五十一年・五十二年度の会費二、〇〇〇円（単年度一、〇〇〇円も可）を同封の振替用紙を利用して納入下さい。前年度の会費納入状況は、会員数約四千名に対し納入者は八百名で、二十％の納入率になっております。このような状態が続くとすれば、今後の同窓会運営は益々困難となり、同窓の消息はつかめなくなり、個々の連絡のみという結果になります。

二、会員名簿の発行について

第二十号の会報で約束いたしました会員名簿の発行が、果せないうちでありますが五十一年一月末日までには必ず発行いたします。

三、雙洲学報第二号の購入依頼について

去る九月一日、雙洲学報第二号の発行をみました。創刊号は同窓会で刊行し、第二号は、学園として同窓会の意を受けて刊行されたものです。この事業を発展させるため是非購入されるようお願い致します。

内容は、期、氏名、住所、電話番号、職業又は勤務先とし、今まで記載しなかつた電話番号の欄を設けます。但し事務局でつかんでいるのは二〇一三〇％の範囲です。

「配布は送料共一、五〇〇円」印刷部数は一、〇〇〇部、昭和四十六年九月発行の名簿は会費納入会員には、料金後払いで発送したこともあって、予想以上に早く品切れとなりました。今回も同様の配布方法をとるか否かは、現在のところ決定しておりませんが、何れにしても、早く品切が予想されますので早目に申込んで下さい。

内容は
日本農業再編の哲学と農民教育（武藤 三雄）
人間性の回復を求めて……田辺扶裕子
農業における生産協同の諸問題
ある農業共同経営史……安藤 義道
緑化樹生産事業の現状と問題点
……同 手塚
船橋場の発展過程……砂田 義雄
農業経営における減価償却費の処理について……石橋 幸雄
……同 編纂部

向、創刊号についても、若干の余部がありますので入用希望者は事務局まで申し込んで下さい。配布額 送料共四〇〇円